

学内行事・学生生活

名物行事 10里マラソン

毎年2月11日には40キロメートルのマラソン競技が催された。琴芝八幡宮裏より木田を経て舟木まで走り、引き返して西宇部から市内に入ってゴールインするというコースが選ばれた。時間を競うほか、忍耐力を養うということで、完走することが要求された。この競技には教官たちも仲間入りした。



渡辺翁記念館前を通過



正門へゴール

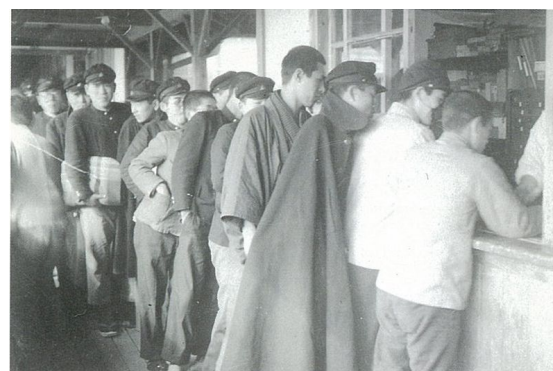
学生生活の様子

当時の学生は蛇腹の学生帽に黒の詰襟が標準的なスタイルだった。靴が正式だが、物資不足のため杉下駄がすり切れて割れるまではいた。夏は学生帽の代わりにカンカン帽をかぶることが許された。学校に至る田んぼ道を白いカンカン帽の列が揺れて登ってくるのは微笑ましい初夏の風物であった。



朝礼

毎朝、朝礼があり、学生・教職員全員が参加しラジオ体操などをした。



売店の様子

物資不足のため入荷時には行列ができた。

鶉之島寮から常盤寮へ 青春を謳歌した日々

昭和14(1939)年7月、入学後1年間は全寮制のため、新入生は鶉之島の仮寮に入居した。学生はこの新設の高工を、いかに伝統ある既設の学校に負けないものにするか、毎夜、寮室で議論に明け暮れ、挙句、三々五々意気投合して町に繰り出し気炎をあげたという。

昭和15年、鶉之島の仮寮より引っ越した寮生たちは、新築の常盤寮で生活をはじめた。各部屋3、4名が起居をともし、寮生の中から選ばれた全寮総務が寮の自治を統括した。学校側では、寮生の監督、相談相手として、舎監や生徒主事、生徒主事補等がその任にあたった。

昭和17年頃には、常盤寮は第1から第6寮が建築され、西日本有数の収容人員を誇る学生寮となっていた。2月、新築まもない第6寮が火災を起こしその数部屋を焼失した。原因は当時寮内で禁止されていた、タバコの不始末によるものであったらしい。



トランプをする寮生(鶉之島寮で)



完成した常盤寮(1・2・3寮)



日曜日の寮掃除

寮祭

寮の行事は、何といても寮祭であった。京都帝大名誉教授の愉快的講演あり、のど自慢大会あり、各科苦心の熱演劇もあって、夜の更けるのも忘れて楽しんだ。学生たちは、自由闊達に、エネルギーに、学校生活を送った。

